

第一章 電車痴漢

朝のとある時間帯の、小さな箱に大量の人がぎゅうぎゅうに詰められた電車内。

席に座れば一息つけるけれど、途中駅から乗る私にとって、それは不可能に近い願いだ。

今日も私はこの満員電車に乗り込み、会社へ向かう。

身長が百五十三センチほどしかない私は、周囲の乗客たちに埋もれるように電車の中へ身体を滑り込ませ、息を潜めて今日もこの圧迫感をやり過ごそうとしていた。

毎日毎日、会社に行くのが憂鬱になるほどの満員電車だ。私は目の前にあるスーツの黒色を見ながら、そっと息を吐く。

だけれど今日はいつもと様子が違い、駅からなかなか電車が発車しない。

この満員具合では、スマホをいじることもしかない。ただただぼう々と待っていると、車内アナウンスがかかった。

「お客様にお知らせいたします。現在、隣の駅におきまして急病人の救護活動を行っております。その影響により、上下線とも運転を見合わせており、およそ五分の遅れが出ております。ご利用のお客様には、大変ご迷惑をおかけいたしますことをお詫び申し上げます」

どうやらトラブルが起きて、電車が止まってしまっているらしい。

いつも時間に余裕を持って出勤している私は、会社に遅れることはないだろうけれど、この満員電車がさらに人がいっぱいになるのでは、と嫌な予感を抱える。

換気のためか、扉が開いた状態で停車しているせいもあり、本来なら次の電車に乗るはずだった人たちが、なんとか入ろうとしてくる。ただでさえ混雑していた車内が、さらにすし詰め状態になっていく。

『ぎゅうぎゅう』という表現がまさにぴったりだと思うほど、私は目の前に立つ男性のスーツへ頬を押し付けんばかりに圧迫され、身動きひとつ取れなくなっていた。

「長らくお待たせいたしました。この電車はおよそ十分の遅れとなっております。ご利用のお客様にはご迷惑をおかけし、誠に申し訳ございません。

せん」

両足で立っているのがやっとの状態でぶるぶるしていると、再度アナウンスが流れる。

ぷしゅうつと空気が抜けるような音がして、軽やかなメロディーが響いて電車の扉が閉まる。

（この状態で次の駅まで……）

朝の快速電車は一度走り出すと次の停車駅までがかなり長い。

ぎゅうぎゅう詰めの中、私は身動きもとれないまま、ただじつと耐えていた。

その時——さわり、とお尻に手が触れる違和感を覚えた。

満員電車なのだから、多少身体が当たってしまうのは仕方がない。

気のせいだと思おうとしていた矢先、しばらくして再び、さわ……とお尻を掠めるような感触が走った。

身動きが取れない状態なのもあってじっとしていると、スカートの上から尻たぶをさわわり、さわりと、撫でられる。

「……っ」

間違はなく、意思を持って触られていた。

痴漢に遭うのは初めてだ。

こんな時、毅然と声を出せる強い女性であればどれだけ良かっただろう。

声を上げたら辞めてくれるのだろうか。それとも手で払えば辞めてく

れるのだろうか。

ぐるぐると頭の中で思考が渦巻く。でも、もしかしたら、本当に偶然手が当たっているだけかもしれない。

（どうしよう、もっとエスカレートするようだったら声を出す……？）
決めかねている間にも、お尻を触る手つきがより大胆になってくる。
けれど、こんな状況になっても、私には声を上げる勇気が出ない。

痴漢も、私が声を上げられない人間だと悟ったのだろう。

スカートをあられもなく捲られ、履いていたストッキングをずり下げられる。そして剥き出しになったお尻を、直接もにやり♡と掴まれた。

「……あっ……！」

誰も彼もが密着してひしめき合う満員電車では、痴漢の被害が起きて

いると気付く人はいない。

特に背の低い私の下半身が剥き出しにされていると気付く人も、痴漢以外にはいないだろう。

尻たぶの柔らかな感触を確かめるように、もにやり♡もにやり♡と大きな手で揉み込まれる。

口の中はすっかりからからになって、張り付いた舌を動かすこともままならない。掠れた息だけが唇から零れ、声にならないまま、じつと耐えることしかできなかった。

触っているのは、後ろに立っている人だろうか。首を動かすことすら困難なほどの混雑で、誰が痴漢をしているのか確かめる術すらない。

ただ、肌を這うごつごつとした大きな手の感触から、相手が男性であ

ることは間違いがなかった。

お尻の感触を存分に楽しんだ痴漢は、私が抵抗できない女だと確信したのだろう。手の動きがますます大胆さを増していく。

太ももと下着の間をゆつくりと撫で上げ、クロッチの中央部分をすりすり♡甘く撫で回される。

ぐち……♡と濡れた感触が伝わり、ぴくりと反応する。

（うそ。私、興奮してる……？）

痴漢にもその湿りはしっかりと伝わったのだろう。

男の手は愉しむように、私に濡れていることを教えるかのように、ぐりぐり♡蜜口を押し込み、粘り気のある感触を伝えてくる。

くち……♡ くちゅ♡ くちゅッ♡

「……っ♡」

こんなに人が大勢いるところで、恥ずかしいところを撫でられている

……♡

カリッ♡

「……あっ♡」

指先が特に敏感な肉芽の先端をかすり、思わず小さな嬌声が漏れ出る。

慌てて口を閉じ、目だけで周囲をきろきろと見回すけれど、イヤホンをしている人も多く、ここで起きている異変に気付く人はいないようだ。

こしゅ♡こしゅ♡こしゅ♡

私の喘ぎ声を聞いたのかは分からないけれど、痴漢の手は、執拗にクリトリスを擦り始める。

(……あつ、やつ……♡これ、きもちい……♡)

クロッチがさらに湿り気を帯び、ぬるぬると濡れていくのが分かる。指で前後に擦られるたび、ぴくん、ぴくんと身体が跳ねてしまう。

刺激されたクリトリスは熱を持ってぷっくりと腫れ上がり、布越しでもはつきり分かるほど主張している。男の手は迷いなくそこをしゅこしゅこ♡撫で上げる。

「ふう……っ♡はぁ……っ♡」

周りに気付かれない程度に、甘い吐息を落とす。そうしなければ、大きな喘ぎ声を上げてしまいそうだった。

後ろから伸びたもう片方の手によって、腰が引き寄せられる。

そうすると、お尻と腰あたりの位置にぐり、と硬いものが押し付けられた。

（っ……、これって……）

明らかに男性の欲情を孕んだ肉棒があてられている。

ぐりぐりとその剛直をお尻に押し付けられながら、クリトリスを撫でていた手がするりと下着の中に入る。

「……っ♡」

ぐちゅり♡愛液がトロトロに溢れた蜜口を確かめるように指先が滑り、粘り気のある蜜を全体にまぶすように塗り込まれる。

（や……、私、こんなにぐしょぐしょになって……っ♡）

見つかってはいけない満員電車でこんなにいやらしいことをされているからか、身体が異常なほど過敏に反応し、熱く興奮していた。

ぬとぬとの愛液を塗り拡げられたあと、その滑りをぶっくり膨らんだクリトリスにまぶされる。

ぬるんっ♡ぬと♡ぬちゅぬちゅ♡にゆるにゆる♡

「あっ……♡は……♡」

（クリ……だめ……っ♡）

ゆっくり円を描くように、ぬちぬち♡撫で回される。側面を爪でピンピン♡と擦られれば、あまりの刺激にびくびくっとな勝手に腰が揺れてしまう。

「あう……♡ん……♡」

(クリ、じんじんして、頭、おかしくなりそう……っ♡)

ふうー♡ふうー♡と荒く息を出しながら、口元に手をあてて、なんとか耐えようとする。

ぴくぴく反応しているのを見逃さず、男の手は責め立てるようにクリトリスをぬりゅっ♡と摘み、ちゅこちゅこ♡優しく扱く。

「うっ……♡……っ♡♡」

ちゅこちゅこちゅこちゅこ♡ちゅこちゅこちゅこちゅこ♡

(あ、ちゅこちゅこだめ……っ、やばい、イク、イク……あづ、だめっ

♡♡)

ちゅこちゅこ♡細やかな振動を連続的に与えられて、もう耐えきれなかった。

(あっあっ、んあ……っ♡痴漢にクリトリス弄られてイっちゃううう

……ッ♡♡ ああ……♡♡♡)

満員電車の中という異常な状態下で、限界まで興奮が高まった私は、
びくっ、びくっ、と一際大きく腰を痙攣させて、絶頂を迎えてしまう。

ぴゅっ♡ぴゅるっ♡

熱い液体が勢いよく漏れ出る感覚がして、潮吹きまでしてしまったの
だと愕然とする。

(やだ……、ばれちゃう……っ)

なんとか周りにバレないようにと腰を揺らしそうになるのを我慢し
て、絶頂の快感を逃す。

その様子に、これまでクリトリスを虐めていた痴漢の手は、容赦なく

ぬとり♡と秘裂に侵入してくる。長い指が肉壁を擦りながらつぶつぶ
ナカを押し広げていく。

（あっ♡や♡ イッたばかりなのに……♡♡）

ぐりんぐりん♡とナカを掻き回され、気持ちが良いところを探られて
る♡

「……っ♡ ハア……っ♡ ハア……っ♡」

だらしなく口を開けて、吐息を逃がす。足がぶるぶると震えて、止ま
らない。

ぐっぼり♡嵌められている指はぐりゅぐりゅ♡ナカを蠢き、もう片方
の手は腰を支えて、お尻に熱い怒濤をぐりぐり♡押し付けてくる。

まるで後ろから体ごと貫かれているような背徳的な格好に、過剰な興

奮を覚えた私の肉壁が、啞えている指をきゅうきゅう♡と強く締め付けた。

やがてリズムカルに、奥の方をとん♡擦られて、切なく甘い快樂が与えられ始める。

（あづ、ポルチオ、突かれてるっ♡だめ……、おく、だめえ♡♡）
ぐちゅぐちゅに溢れる愛液をまとった二本目の指が侵入し、容赦なくナカを責め立ててくる。

奥の方をとちゅとちゅ♡擦りながら、手のひらの根本の膨らみで、クリトリスも同時に強く推し擦られていた。

「~~~~♡ ッ♡♡♡♡」

（気持ち、よすぎて、むりっ、むりい♡♡イク♡♡ ナカと外から気持ち

ちよくされて、イッちゃう♡♡♡

ふうー♡ふうー♡と快感に震える熱い息を吐きながら、また絶頂へと押し上げられていく。

快感を覚えてしまったアソコからは絶え間なくぴゅっ♡ぴゅっ♡と潮が吹き出していた。

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡ぐちゅんっ♡♡

（あっあっ、飛ぶ、あ…っ、おづ、♡♡）

「んおっ…っ♡♡♡」

我慢しきれない喘ぎ声が汚く漏れ出る。もう周りの目を気にしてられないほど、気持ち良かった。

絶え間なく膣奥とクリトリスを擦られ続け、私は我慢できずにふわり

と絶頂に達してしまった。先ほどよりも一際激しく足腰が痙攣を繰り返す。痴漢はしっかりと腰を抑えていて、そのお陰で無様に倒れてしまうことはなんとか免れた。

「……っ♡♡ハァ……っ♡ふっ♡」

絶頂の余韻で目元も口元もとろんと蕩けてしまう。それでも痴漢は容赦なく、淫らな行為を止めるつもりはないようだ。今度はぬとりと熱く太いものが蜜口に添えられるのを感じる。

（うそ、挿れるの……？）

そんなの、周りに絶対バレちゃう……♡♡

※この続きは本文で♡

第二章 流された私、ラブホテルのシャワー室でぬるぬるえっち

今日の仕事は散々だった。

いつもはしないような小さなミスをたくさんしてしまい、上司には怒られるよりも心配されてしまった。おまけに下着も汚れているし、何か変な匂いはしていないだろうかと終始気になってしょうがなかった。

だけれどこんな最悪な一日になってしまっても仕方がない。朝から激しい痴漢に遭い、さらにはその痴漢相手があのだ、会社のアイドル的存在、東堂千紘だったのだから。

（信じられない……）

あの、爽やか王子が痴漢？ しかも、彼は結婚をしているのだ。不倫

ということ？

私は就業時間を過ぎた会社の中で、今朝渡されたメモを見つめながら、果たして連絡を取るべきなのかどうか、迷いに迷った。

そして――。

気付けばあれよあれよと言う間に、東堂さんの隣に並び立ち、ラブホテルの一室の前にいた。

（朝のえっちが気持ち良すぎて……。流されてしまった……。）

ちらりと彼の左手をさり気なく見れば、いつもは付けているという指輪は外されていた。

（罪悪感から……？　それとも、今更私が知らないとても、思っ

る？)

彼は人気がありすぎる故に、既婚者であるという事実は女性社員たちの情報網によって社内中に知れ渡っていた。

奥さんがいるのに、こんなことをしている彼も、私も、どうかしている。

内心頭を抱えながらも、朝から刺激された性欲に、抗う強い意志を私は持っていなかった。

「シャワー浴びようか」

「あ、はい……」

反射的に返事をしたけれど、東堂さんが自分が着ていたスーツをおもむろに脱ぎ出したため、ぱっと目を逸らす。ちらりと見えた筋肉質の肌

が、妙に艶めかしかった。

「おおお、お先にどうぞ」

「一緒に入るんだよ」

「えっ、い、一緒に……ですか……」

「もちろん」

しゅるりとネクタイを緩めてワイシャツを脱げば、東堂さんの綺麗な上半身があらわになる。引き締まった体躯が視界の隅に映って、顔ごと背けた。

「手伝ってあげようか？」

「えっ……、ひゃ……っ」

東堂さんの手が私の方に伸び、ブラウスのボタンを器用に外し始め

る。上からひとつずつ順番に外されていき、白いキャミソールが丸見えになる。うっすらと透けるブラジャーも、見られてしまう。

これはこれで恥ずかしいと気付いた私は「じ、自分で、脱げますっ」と一思いに下着を取り払う。こうなることを期待して来ているのだから。恥ずかしがっていてもしょうがないだろう。

締め付けるものがなくなって、ふると震えるふたつの膨らみ。これからの行為に期待を滲ませた先端は、すでに赤く色付き、固くツンと立ち上がっていた。

ショーツもえいやつと脱ぎ、下生えを隠しつつちらりと東堂さんを見れば、彼も着ていた衣服を脱ぎ終えたようだ。

今朝は見る事がなかった大きく膨らんだ男根が、しっかりと勃ち上

がって唆り立っているのを見れば、ごくりと生唾を飲んでしまう。

（今朝、挿れられただけで気持ちよかったのに……。あれをナカに挿れて、動かれたら……。どうなっちゃうんだろう）

どくどくと心臓の音がうるさいほど高鳴って、お腹の底が熱く湿り気を帯びている気がした。

両手にボディソープの泡を取った東堂さんは、背後から手を回して私の胸に泡を滑らせていく。

「……！ ん、ふう……。♡」

大きな手が、ふにゆふにゆと胸の膨らみを下から持ち上げ、形を変えながら優しく揉み込んでいく。泡によって滑らかに滑る手が心地いい。

胸を揉まれながらお尻と腰のあたりに硬く熱い怒張を押し付けられて、きゅん♡と下腹部が反応した。

「おっぱい、ふにふにで気持ちいいね……。手に吸い付いてくるみたいだ」

耳元で低く甘い声で囁かれて、頭がぼうつとしてくる。

胸の形を変えて柔らかさを楽しんでいた手が、今度は先端を避けて焦らすように乳輪を撫で始める。

「あ♡は……♡」

早く触ってほしくて、ぴくぴく身体を振り、なんとか指で擦ってもらおうと胸を揺らしてしまう。

「触ってほしい？ いつも清純そうなのに、身体はこんなにやらしく

て、意外だなあ。痴漢されてあんなに興奮しちゃうんだから、それもそうか」

「ん、あっ♡」

「焦られるのも好きでしょ？ ほら、すり……すり……。ぷっくり勃って、かわいい乳首……」

すり♡すり♡カリカリ♡

先端の粒の境、色が変わっている部分を入念になぞられ、時に爪でカリカリ♡される度に、ピクピク胸を跳ねさせてしまう。

東堂さんはそれだけでは飽き足らず、口元にあった耳輪をかぶり♡と咥えた。

「!! んんんっ♡」

耳の縁に甘く齒を当てられて、びりびりとした快感が耳から伝わる。

そしてそのままれろり♡と縁に沿って熱い舌が這わされる。

ちゆる♡じゆる♡れろ……♡ちゅっ、ちゅっ♡ぬぷ……♡

「あう……♡それ、だめ……♡やあん……♡」

乳輪をすりすり♡撫でられながら、耳全体を舌が這って。ぞくぞくとした快感が止まらない。

「ほら、触ってあげる。こうして欲しかったんでしょ？ 乳首、しこし

こ……♡気持ちいいねえ？」

「ひぁっ……♡ああっ♡」

東堂さんの親指と人差し指がついに乳首をきゅっと摘み、しこしこ♡擦り上げる。ずっと焦らされていたせいで、甘い快感がダイレクトに身

体を駆け抜けた。ボディソープの泡によってぬるぬるにされている感触がいつもの倍以上に気持ちが良いくて、抑えきれずに甘い声を出してしまう。

「あっ、はァ♡ん♡ あんんっ♡」

そのまま東堂さんの手はにゆるにゆる♡先端を擦ったり、かと思えば乳房に埋まるぐらい押し潰してぐりぐり♡揺らしてみたりと、好き放題に突起をいじめてくる。

「やぁ、それ、気持ちいい…っ、あんっ♡♡」

「気持ちいいのちゃんと言えてえらいえらい♡ご褒美に耳もいっぱい舐めようね」

「あっ♡んあぁ、らめ、こえ、響く、あっ♡♡♡」

耳たぶをはむっ♡と喰まれ、れろりと舌が耳のきわに沿って舐め上げる。

水音が直に聞こえてきて、ぞくぞくとした震えが伝わって、ぐんと背中を反らせる。

厚い舌がぐぼりと耳の中に入り、ちゅくちゅく♡舐められ、吸われる。その間も乳首はこりこり♡擦られて、甘美な快楽が絶え間なく襲いかかる。

「ほあ……っっ♡だめ、ちくび、と、みみ、だめっ、……あ、いぐっ♡」

乳首イキなんてしたことがないのに♡耳と一緒に責められて、初めて乳首でイっちゃいそう……っ♡

くぼくぼ舌で耳穴を蹂躪されながら、にゆるにゆるの泡立ちまみれの手でぐりぐり♡容赦なく乳首を擦られ続け、ついに背中を反らせて甘イキに達すると、ぷしゃっ♡ぷしゃっ♡とまた潮が吹き出た。水を出していないシャワー室の床に、ぽたぽたと滴り落ちて水たまりができる。

普段、こんなにすぐにイクことはないのに。東堂さんの責め方がうますぎるのか、身体が変に興奮してしまっているようだった。

「うつ…、はあっ♡はあー♡ふうっ…♡♡」

「こんなに簡単にイッちゃって、えっちな体だねえ。クリトリスも弄ってあげるから、もっと気持ちよくなろうね？」

※この続きは本編で♡